

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## シモーヌ

配給/ギャガ・ヒューマックス

2003 (平成15) 年8月15日鑑賞

<ヘラルド試写室>

Data

監督・脚本・製作: アンドリュー・ニコル

出演: アル・パチーノ/レイチェル・ロバーツ/キャサリン・キーナー/エヴァン・レイチエル・ウッド

## 👁️👁️ みどころ

「完全無欠」の女優「シモーヌ」の生みの親はアル・パチーノ演ずる、今は「落ち目」のタランスキー監督。「シモーヌ」は一躍世界の人気モノ。そしてアカデミー主演女優賞を受賞。しかし、CG合成から生まれた「シモーヌ」は誰もホントに見たことがない……。そのため予想もつかない展開が……。こんなオシャレなハリウッド映画大好き！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

### <完全無欠の女優「シモーヌ」とは？>

女優「シモーヌ」とはCG（コンピューター・グラフィック）で合成された美人女優。だからあらゆる女優のあらゆる魅力をすべて備えているうえ、演技力も最高。従って、その魅力そのものが「つくりモノ！」と見抜かれぬ限り、「完全無欠」な女優となるわけだ。

このCG女優をつくる画期的なソフトを開発したのは、謎のコンピューター・エンジニアのハンク・アレノ（イライアス・コティーズ）。タランスキー監督の作品をこよなく愛しているハンクは、死の直前、このソフトをタランスキー監督に贈呈した。

CG女優シモーヌを演ずる本モノの女優は、レイチェル・ロバーツ。ジュリア・ロバーツに似た大きな口元が魅力の25歳。ハリウッド映画初出演だ。

### <落ち目のタランスキー監督を演ずるのはアル・パチーノ>

タランスキーは、かつてアカデミー賞に2度ノミネートされたこともあるが、今は落ち目の監督。今製作中の映画では、主演女優にワガママ放題を言われた挙句に降板されたうえ、今は製作会社を経営する立場となっている元妻のエレイン（キャサリン・キーナー）

からは、監督そのものからも降ろされ、ニッチもサッチもいかない状態。「いい作品をつくりたい！」といくら力んでも、「映画はビジネスよ！」と言われると、どうしようもない！

こんなタランスキー監督を優しく慰めてくれるのは、2人の「復縁」を願っている実の娘のレイニー・クリスチャン（エヴァン・レイチェル・ウッド）だけだった。

### <シモーヌを起用した作品は大当たり！>

新人女優「シモーヌ」を主演女優に起用したタランスキー監督の作品『サンライズ・サンセット』は大当たり！たちまちシモーヌは世界の人気女優に。当然、インタビューや取材が殺到した。しかし、シモーヌをコンピューターで管理するのはタランスキー監督だけ。「女優はあくまでも素材と心得、すべて監督の指示通りに演じます」と心得ているシモーヌは、一切人前に出ることを拒否。これがかえってマスコミの「シモーヌ」人気に拍車をかけた。生出演や直撃インタビューはムリでも、ハンクが発明したCGグラフィックのソフトを使ってコンピューターを操れば、かなりのウソは可能。

もともと虚構の世界に近い映画界やマスコミ界は、虚像のシモーヌをつくりあげ、全世界はシモーヌの魅力に酔った。もともと、この「巨大な詐欺」を維持するためにタランスキー監督が費やすエネルギーは大変なもの。

前作『インソムニア』（1998年）では神経質な不眠症の刑事役を熱演したアル・パチーノが、この『シモーヌ』では、タランスキー監督になりきり、軽妙な演技を見せているのはさすが！

### <物語は俄然シリアスに・・・>

こんなコメディタッチの物語が後半は俄然シリアスになっていく。それはシモーヌが全世界の人気モノとなり、その「存在」が絶対的なものになるにつれて、次第にタランスキー監督の手元を離れて、「一人歩き」を始めたためだ。

問題の第1は、元妻のエレイン。今やシモーヌとタランスキー監督のことしか考えられなくなったエレインに現在の夫は離婚宣言。そしてエレインもタランスキーとの復縁は無理なことと分かりつつ、シモーヌに「嫉妬心」を燃やし始めた。

問題の第2は、第1作の『サンライズ・サンセット』、第2作の『永遠の彼方』という2つの作品でアカデミー主演女優賞を獲得したシモーヌが、タランスキー監督へのお礼の言葉を忘れたことによる影響だ。

### <誰にもあるやっかいな「嫉妬心」>

タランスキー監督は、シモーヌを売り出したかったのか、それともシモーヌを売り出すことによって監督である自分自身を世間に認めさせたかったのか。こんな微妙な「嫉妬心」が揺れ動くようになると、タランスキー監督とシモーヌとの間の2人の人間関係（？）に

も微妙な陰がさしてきた。

面白いのは、タランスキー監督が嫉妬心からられて(?)、シモーヌの人気を低下させるべく、コンピューターを操作してシモーヌのイメージを落とそうとする試みだ。なるほど、タランスキー監督の嫉妬心やそんな仕打ちに走る気持ちもよく分かる。しかし、人気絶頂となり、虚構の世界が確立してしまっている今、シモーヌがいくら悪ぶっても、それがまた新たな魅力となってしまう、タランスキー監督のシモーヌの人気を低下させようとする思惑は、すべてカラ振りに終わってしまう。世界の人気女優として、シモーヌの「存在」は絶対的なものになってしまっていたのだ。

### <シモーヌの「抹殺」は殺人罪か?>

そこでタランスキー監督がとった行動は……。何とタランスキー監督は、コンピューター・ウィルスを持ち込んで、シモーヌを「抹殺」してしまったのだ。そして、その「抹殺」とともに、シモーヌに関する各種コンピューター資料も海の中へ投げ捨ててしまった。しかしこれは、タランスキー監督にとってはコンピューター上の処理だったが、世界のシモーヌのファンには許されないことだった。

そのためタランスキー監督は、シモーヌの「殺人犯」だと疑われ、遂に逮捕。最初は「ちょっとした手違い」と思っていたものの、事態はどんどん深刻化していった。タランスキー監督が弁解すればするほど、タランスキー監督が語る「へんな物語」は心神喪失状態によるものとされ、遂には精神鑑定が必要と言われ、「死刑は絶対!」という窮地に陥ってしまったのだ。

### <タランスキー監督の窮地を救ったのはコンピューターオタクの愛娘>

シモーヌが「消えた」ことについて、関係者はすべてタランスキー監督が犯人だと証言した。つまりタランスキー監督の嫉妬心はその犯行の動機だ。そして誰が考えても、そうだと思われる外観がタランスキー監督自身によってつくり出されていた。元妻のエレインにもそれは否定しようのない「事実」だった。

しかし、これを疑ったのは、虚構の世界に毒されない目を持った、タランスキー監督の愛娘のレイニー。レイニーは、誰もシモーヌを近くで実際に見たことがないし、話したこともない、シモーヌはコンピューター上作り出された虚構の女優だと見抜き、タランスキー監督のコンピューターを調べるうち、ついにシモーヌを「抹殺」したコンピューター・ウィルスを発見した。そして抹殺したウィルスを発見できれば、回復させるための「薬」の投薬も可能。たちまちシモーヌはコンピューター画面に「復活」した。

### <めでたし、めでたしのハッピーエンド>

こんなマンガみたいな話だが、世界の人たちの「目」には、本当にシモーヌが復活した

わけだ。その「殺人事件騒動」も「シモーヌ長期休養を実現するため」と説明されておしまい。世間なんてバカばかりだ。しかしこれによってタランスキー監督は無事釈放され、死刑を免れることができた。

シモーヌ「復活」の真相を知っているのは、元妻のエレインと愛娘のレイニーだけ。もはやシモーヌを抹殺することは不可能と悟ったエレインとレイニーは、シモーヌとタランスキー監督が「結婚」し、4人(?)で生活しようと提案。タランスキー監督もそんな素晴らしい(?)提案に乗った。そして今やタランスキー監督との間に一児をもうけたシモーヌは、これから政界に打って出ると宣言し、今日はテレビでそのインタビューだ。

世界はシモーヌの動向に今も夢中。しかし、このインタビューも実はタランスキー監督の一人芝居にシモーヌの動きを重ねたCGの世界だけだ。何ともはや・・・。

### <総評>

何といっても、コンピューター・グラフィック上の完全無欠の女優シモーヌという設定がユニークであるうえ、そのシモーヌの「抹殺」すなわち「殺人事件」という意外な展開が面白い。

前半のコメディタッチから、後半は突然シリアスな法廷ドラマに・・・と思った途端、また愛娘の知恵により予想もつかないハッピーエンドに。

最近珍しい、何ともオシャレなハリウッド映画。これを支えるのが、アル・パチーノのコミカルな演技とシリアスな演技。そしてシモーヌを演ずる新人女優レイチェル・ロバーツの魅力。

大金をかけたアクション巨編もいいが、「企画力」で売るこんなオシャレなハリウッド映画を、これからも次々とつくってもらいたい。

こんな映画、大好き！

2003 (平成15) 年8月16日記